

『大学歌』誕生に関わる説明

広島大学にはフェニックス、学章（学旗）、そして大学歌という三つの象徴があります。このうち、大学歌は、昭和30年に制定の企画が持ち上がり、学生、卒業生、修了生、職員を対象に、同年9月20日付けで歌詞の募集が行われました。

集まった44点の作品の中から、森戸辰男学長を委員長とする大学歌審査委員会（委員21名）が3編を入賞候補に選び、その後の選考を小川二郎教授（文学部）、真下三郎助教授（同上）、羽白幸雄教授（教養部）の3名からなる小委員会に一任しました。

小委員会は、文学部生の山中有人（すみと）氏の作品を最有力として選び、これに修正を加えて「入選歌詞」としました。この修正後の「入選歌詞」が、昭和32年3月16日の評議会で承認され、大学歌として制定されました。

このような手順を経たため、作詞は個人名ではなく、「広島大学選定歌詞」となっています。

一方、大学歌の作曲は、広島大学教育学部音楽科となっています。当時、教育学部福山分校音楽科には、元NHK交響楽団指揮者の高田信一教授が在職されていました。作曲の委嘱先を検討した際、作曲の専門家として高田氏の名前が挙がっていたことが評議会議事録で確認できますが、名目上、作曲は音楽科に委嘱されました。

曲は昭和32年7月までに完成し、昭和32年9月13日の評議会で試聴されました。同日の評議会議事録には「広島大学歌作曲を（教育学部）福山分校に委嘱していたが、出来上がって録音したので試聴に供する」とあります。

このような経緯から、作曲についても、個人名ではなく「広島大学教育学部音楽科」となっています。

広島大学歌は、昭和32年11月5日に広島市公会堂で開催された開学記念行事としての教育学部福山分校音楽科による音楽演奏会で、同音楽科交響楽団及び同合唱団によって披露されました。

なお、当時の森戸学長は、後に自著『広島大学再発足のころ』の中で、「募集された学歌は羽白教授の手が加えられて、あのようなよいものになったのだそうです。簡素で格調の高い文語体のこの学歌は、第一節が『光あり』、二節が『流れあり』、一これは広島市を流れる太田川の七つの川(※)をさしているのです。一三節が『緑あり』で唄（うた）い初められ、それぞれ『真(まこと)をぞきわめん望みなり』『善きをこそ努めん集いなり』『美(は)しきもの求めん願いなり』

で結ばれて、ここに学ぶものの真・善・美を追求する不撓(ふとう)の意欲が表明されております」と解説しました。

そして「このようにして、この学旗と学歌とそしてシンボルとしてフェニックスをもつことによって、寄り合い世帯である大学の精神的な一体化を実現してゆく気運を促進したいと念じたのであります」と述懐しています。

※ 猿猴(えんこう)川、京橋川、元安川、太田川(本川)、天満(てんま)川、福島川、山手川の七つをさす。後に福島川・山手川の改修で放水路が完成したため、現在川の数は一つ減った。

注) 本文は、『広大フォーラム』第33期6号(No.369)2002.4.1に「広島大学50年史編集室だより」として掲載された小宮山道夫氏の記事を基にして、編集したものである。